マタイ 6:25-34「思い煩いを委ねる」

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値があるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装っていてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それらはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」

わたしたちは、自分が、いつ、どこで、どのように生まれるか、ということを、自分で選ぶことができません。その意味で、わたしたちの命とは、わたしたちの知らない場所から始まったもの。わたしたちの知りえない場所で始まったもの。わたしたちの理解を超えたところから始まったもの、と言うことができるでありましょう。

わたしたちはまた、自分が、いつ、どこで、どのように死ぬか、ということも、自分で選ぶことができません。その意味で、わたしたちの命とは、わたしたちの知らない場所へ向かうもの。わたしたちの知りえない場所へ向かうもの。わたしたちの理解を超えたところへ向かうもの、と言うことができるでありましょう。

このようなわたしたちの命を特徴づけているものが「不安」であります。それは、わたしたちが自分でコントロールすることが不可能である、というところから来るところの不安であります。

この不安は、根源的には二つの不安であります。第一は、わたしたちの誕生から来るところの不安。わたしはどこから来たのだろうか。わたしとは何者なのだろうか。わたしはなぜここにいるのだろうか。そういう不安であります。第二は、わたしたちがやがて迎える死から来るところの不安。わたしはどこへ行くのだろうか。わたしはどうなってしまうのだろうか。わたしはなぜ死ななければならないのだろうか。そういう不安であります。

誕生と死と、この二つの根源から来るところの不安は、わたしたちの命とは、切っても切り離すことの出来ない不安であります。誕生と死と、この二つの根源から来るところの不安は、わたしたちの命にたえずまとわりついていて決して離れることのない影となっている不安であります。

この根源的な不安が、わたしたちが誕生してから、わたしたちが死を迎えるまでの人生の日々において、わたしたちの生活の中にさまざまの影を落とす働きをしております。

その不安は、時に、わたしはいったい何を食べたらよいのだろうか、という具体的な不安となって現われてまいります。その不安は、時に、わたしはいったい何を飲んだら食べたらよいのだろうか、という具体的な不安となって現われてまいります。その不安は、時に、わたしはいったい何を着たらよいのだろうか、という具体的な不安となって現われてまいります。

そのような不安について、わたしたち自身は、自分で解決する方法は何ら持っておりません。確かに、具体的な不安に対して、わたしたちは何かの具体的な対処をすることはできるでありましょう。食べ物の不安については、食べ物でもって対処することはできるでありましょう。飲み物の不安については、飲み物でもって対処することはできるでありましょう。着る物の不安については、着る物でもって対処することはできるでありましょう。しかし、それらの不安の根源にあるところの、ほんとうの不安。この根源にあるところの不安に対しては、わたしたち自身は、自分で解決する方法を何ら持ってはおりません。

なぜなら、この根源的な不安は、わたしたちの知らないところから来た不安、わたしたちが決して知りえないところから来た不安だからであります。なぜ、わたしは、このようなわたしとして、生まれて来たのか。わたしは、いったいどこへ行こうとしているのか、わたしは、いったいどのようになってしまうのか。この誕生にかかわるところの不安、この死にかかわるところの不安は、わ

たしたちの手が決して届かないところから来るところの不安であります。わたしたちの手が決して届かないところから来る不安であるゆえに、わたしたちは、この不安を、自分自身で解決する方法を全く持っておらないのです。

しかし、この不安の中にあるわたしたちに向かって、この不安をつきぬけるようにして、主イエスキリストのお言葉がひびいているのであります。「恐れるな、小さき者よ！」

今日お読みした聖書において、主イエスキリストは宣言しておられます。「天の父がすべてご存じである」　すなわち、たといわたしたちが知らない、また、知りえないことがあるとしても、天の父はすべてご存じである。この宣言「天の父がすべてご存じである」の上に、わたしたちは今日、おのれの小さな信仰をもって、しっかり立たなければなりません。

今日の聖書箇所において主イエスキリストは、鳥や野の花を指し示して、それらの命の根源が、創造主なる父なる神ご自身にあることを、明らかにしておられます。あらゆる命の創造者、あらゆる命の創始者なるお方。わたしたちの父なる神が、わたしたちの誕生の彼方に立っておられる、そうして、わたしたちの死の彼方に立っておられる、ということであります。

わたしたちの誕生。その誕生よりも前にあるものに、わたしたちの手は決して届きません。わたしたちの誕生。その彼方にあるものに、わたしたちは決して手を伸ばしえません。しかし、わたしたちは知らなければなりません。わたしたちの誕生の彼方に、父なる神が確かに立っておられるということ。このことをわたしたちは、知らなければなりません。

わたしたちの誕生の彼方に立っておられる神は、聖書を通して、このように宣言しておられます。イザヤ書第 43 章 1 節の御言葉であります。

「ヤコブよ、あなたを創造された主は、イスラエルよ、あなたを造られた主は、今、こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名をよぶ」

この宣言は、ほかならぬ父なる神が、わたしたちの命を始めてくださったお方だということ。そうして、わたしたちの命が、父なる神の御手の中に置かれているということを、示しております。

わたしたちの誕生の彼方に立っておられる神は、聖書を通してまた、このように宣言しておられます。エレミヤ書第 1 章 5 節の御言葉であります。

「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた」

この宣言は、主イエスキリストの御言葉を真実に確証するものであります。主イエスはおっしゃいました。「天の父はすべてをご存じである」　実にわたしたちは、神によっておのれのすべてを知られている存在であります。

わたしたちは自分がどこから来たかを知らないでおります。しかし、神はご存じです。

わたしたちは自分が、なぜこのようなわたしとして生きているのか、知りえないでおります。しかし、神はご存じです。

わたしたちは、自分が、これからどうなっていくのか、どこへ行こうとしているのか、そうして、やがて訪れる死の彼方において、自分はどうなってしまうのか、知りえないでおります。しかし、神はご存じです。

実にわたしたちは、神によっておのれのすべて知られている存在であります。その神は、こんどは、わたしたちが神を知ることができるようにと、神ご自身を目に見えるすがたかたちをとおして、わたしたちに現してくださいました。それがわたしたちの主イエスキリストであります。

わたしたちたちは、主イエスキリストにおいて、主イエスキリストをとおして、父なる神を知ることができるようにされております。わたしたちをすべて知っていてくださる父なる神。わたしたちの命を創造してくださった父なる神。わたしたちの命の創始者なる父なる神。その神を、わたしたちは、主イエスキリストにおいて、主イエスキリストをとおして、知ることができるのであります。主イエスキリストご自身、こう言っておられます。ヨハネによる福音書 14 章の御言葉です。

「あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている」（7 節）

「わたしを見た者は、父を見たのだ」(9 節)

「わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行なっておられるのである。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい」(10 節)

そうして、わたしたちがやがて迎える死の彼方に立って、わたしたちを待ち構えていたもうのは、この主イエスキリストによって示されたているところの、わたしたちの父なる神であります。

わたしたちは、どこへ向かおうとしているのだろうか。私たちは、どうなってしまうのだろうか。死の彼方において、何がわたしたちを待っているのだろうか。わたしたちの父である神が、そこでわたしたちを待っておられるのです。

主イエスキリストはこのようにおっしゃいます。ヨハネによる福音書第 14 章の御言葉です。

「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む」(23 節)

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」(1 から 3 節)

誕生、そして、死。この二つから来るところのわたしたちの不安。しかし、その不安をつきやぶるようにして、主の声がわたしたちのもとに、ひびいてまいります。「恐れるな、小さき者よ！」という主の呼びかけであります。

いまやわたしたちは、知っております。わたしたちの誕生の彼方に、神が確かにおられるということ。その神が、わたしたちの命を始めてくださった、ということ。

いまやわたしたちは、知っております。わたしたちの死の彼方に、神が確かに立っておられるということ。その神が、わたしたちの命を待ち迎え、わたした

ちの命を受け取ってくださる、ということであります。

このようにして、わたしたちはいまや、誕生から始まって死へと向かう自分の歩みを、新しい仕方でもって表現することができるようにされています。すなわち、「わたしは神から出て、神に帰る」であります。

わたしたちはもはや、自分の命というものは、不安の中を迷い歩くものではなくて、ひとつのしっかりとした出発点と、ひとつのしっかりとした終着点を持って、ひとつのしっかりとした方向が定まった、確かな歩みとされていることを知るのであります。すなわち、「わたしは神から出て、神に帰る」という、このまっすぐな、このはっきりとした、この確かなものとされた歩みであります。

この「わたしは神から出て、神に帰る」という歩みにおいて、わたしたちは、自分ひとりで歩くように、と言われているのではないことに、注意いたしましょう。ルカによる福音書第 24 章において、このように言われているからであります。

「(二人の弟子たちが) 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」(15 節)

一緒に歩き始めておられる主イエスキリストであります。「わたしは神から出て、神に帰る」という、この歩みにおいて、わたしたちと一緒に歩んでくださる主イエスキリストであります。わたしたちは、信仰のまなこを開いて、人生の同伴者である主イエスキリストのお姿を見ることがゆるされております。

さらに主イエスキリストは、このように宣言しておられます。マタイによる福音書 28 章の御言葉です。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(20 節)

このようにして、いまやわたしたちは、自分の人生を、まったく新たな見方で見させられることになります。そこにまだなお、おぼろな不安の影がさしているとしても、わたしたちは、信仰によって、このように言うことができるのです。

「わたしは神から出た。わたしはいま神と共に歩む。主イエスキリストがわた

しと一緒に歩んでいてくださる。そのようにして、わたしは神のもとへ帰る」

この感覚、この実感こそが、あの詩編の作者が歌にした信仰の感覚であります。すなわち、詩編第 139 編の御言葉であります。

「主よ、あなたはわたしを究め
　わたしを知っておられる。
　座るのも立つのも知り
　遠くからわたしの計らいを悟っておられる。
　歩くのも伏すのも見分け
　わたしの道にことごとく通じておられる。
　わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに
　主よ、あなたはすべてを知っておられる。
　前からも後ろからもわたしを囲み
　御手をわたしの上に置いてくださる。
　その驚くべき知識はわたしを超え
　あまりにも高くて到達できない。
　どこに行けば
　あなたの霊から離れることができよう。
　どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。
　天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
　陰府に身を横たえようとも
　見よ、あなたはそこにいます。
　曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも
　あなたはそこにもいまし
　御手をもってわたしを導き
　右の御手をもってわたしをとらえてくださる。
　わたしは言う。
　『闇の中でも主はわたしを見ておられる。
　夜も光がわたしを照らし出す』
　闇もあなたに比べれば闇とは言えない。
　夜も昼も共に光を放ち
　闇も、光も、変わるところがない。
　あなたは、わたしの内臓を造り
　母の胎内にわたしを組み立ててくださった。
　わたしはあなたに感謝をささげる。

わたしは恐ろしい力によって
驚くべきものに造り上げられている。
御業がどんなに驚くべきものか
わたしの魂はよく知っている。
秘められたところでわたしは造られ
深い地の底で織りなされた。
あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。
胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。
わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。
まだその一日も造られないうちから。
あなたの御計らいは
わたしにとっていかに貴いことか。
神よ、いかにそれは数多いことか。
数えようとしても、砂の粒より多く
その果てを極めたと思っても
わたしはなお、あなたの中にいる」（1 から 18 節）

「わたしはなお、あなたの中にいる」　詩編の作者の到達した信仰的な境地は、この一言の中に凝縮されております。「わたしはなお、あなたの中にいる」であります。わたしは神から出た。わたしは神と共に歩む。わたしは神のもとに帰る。そうしてしかも、わたしはなお、神の中にいる。

このようにしていまやわたしたちは、自分の思い煩いを、神に委ねることができるようにされております。主イエスキリストが、わたしたちをこのように招いておられるからであります。すなわち、「思い悩むな。天の父がすべてご存じであるから」という招きであります。

わたしたちの命の創始者であり、わたしたちの命の同伴者であり、わたしたちの命の導き手であり、わたしたちの命を待ち向かえ受け取りたもう神に、主イエスキリストをとおして、わたしたちの思い煩いを、お委ねいたしましょう。主イエスキリストは今日、そのようにするようにと、わたしたちひとりひとりを招いておいでです。

祈りましょう。

祈り

天の父なる神様。あなたの御子イエスキリストを通して、いま、わたしたちの生きることについてのもろもろの思い煩いを、お委ねいたします。
これらの思い煩いは、わたしたち自身によってはどうにも解決することのできないものでありますゆえ、わたしたちはいま、あなたに全くお委ねすることにいたします。
いまどうか、わたしたちの信仰のまなこを開かせてくださって、わたしたちの命が、神よ、あなたによって始められたものであることを、見させてください。
わたしたちの命が、神よ、あなたにまっすぐに向かうものであることを、見させてください。
わたしたちの地上の歩みの終わりのところにおいて、神よ、あなたがわたしたちの命を受け取るために、待ち迎えていたもうことを、信仰のまなこによって、見させてください。
そうして、それだけでなく、主イエスキリスト、ご復活の主イエスキリストが、わたしたちの人生の同伴者として、きょう、いま、ここで、わたしたちと共に歩んでいてくださることを、信仰のまなこによって、見させてください。
主イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。アーメン